

高梁の 近代化遺産 9

玉川橋 (玉川町玉・松山)

第七回の拙稿で紹介した田井橋同様、昭和九年の室戸台風被害から復興した橋梁には、中井橋、方谷橋、落合橋、玉川橋があります。方谷橋は国道工事に伴って市街地側のプレートガーダーが短縮され、復興落合橋は親柱を残すのみです。中井橋と玉川橋は完成した昭和十一年頃の姿をとどめます。

今回は、玉川町と松山広瀬に架かる玉川橋



四季の変化を高梁川の風に感じる玉川橋。人工物ながらトラスの赤い鋼材が周囲の景観とシンクロしているようです。

を取りあげます。

藤井郁夫氏は、『岡山県の近代化遺産―岡山県近代化遺産総合調査報告書（平成十七年）』で、玉川橋の特長を「川幅、特に流水区間が幅広くなった場所では大支間が可能なトラス橋を、等支間長で複数径間を架設している」と述べています。ワレントラス部分は支間長四十五・六五メートル一連と四十五・七二メートル二連。ほぼ等間隔で並ぶ三つのトラス桁と十・一メートルのコンクリート桁の四連構造で、橋長（橋の全長）一五七・七メートルに対して橋脚はわずか三本。洪水の教訓を活かした設計です。

江戸時代までわが国に架けられた橋の材質は木、土、石。山が急峻で台風の上陸頻度が高い九州では、種山石工などがアーチの石橋を数多く造りました。加工しやすい安山岩が豊富にあったためです。明治になり、鉄道と共に発展した橋桁はプレートガーダー。備中川面駅前後に架かる四本の伯備線高梁川橋梁などがそうです。プレートガーダーは、I形鉄材を並べた単純な構造で、架設も容易だったことから広く普及しました。ところが、五十メートルを超える支間長の橋梁には、より強度の高い桁が必要でした。そこで登場したのがトラス橋です。細い部材を三角形状に組み、ピン結合した単純な骨組橋梁構造物には、設計・製作が容易で強度・鋼度が高いというメリットがあるため、全国各地に広まりました。



長い支間長のワレントラスが3つ連なる美しい玉川橋。洪水の時も流木などが引っ掛りにくい橋脚、流面と通行路の間に構造物を持たない下路式は室戸台風復興橋梁ならではの特長。

藤井氏によると、旧玉川橋は一連の下路トラス橋と木桁橋。昭和四年の竣工です。このうちの木桁部分が室戸台風で被災。そこで、被害を免れた橋と同じ形でほぼ同じ寸法のトラス橋二連を増設しました。

玉川橋には灯籠型の親柱があります。車で通り過ぎたら気がつかないかもしれません。高梁市内で灯籠型親柱を持つ橋は、紺屋川に架かる相生橋や有漢川を跨ぐ巨瀬町の柳橋などです。玉川橋の幅員は四・五七メートル。けっして広いとはいえませんが、橋の上から眺める高梁川と山々が織りなす四季の風情には息を飲みます。

（文・吉備国際大学社会学部ビジネスコミュニケーション学科学科准教授・小西伸彦さん）